

# 教員の勤務時間と情報活用能力の関連及び 学校業務遂における情報活用能力の必要感の検討

Relationship Between Teacher Working Hours and Information Utilization Ability  
and Examination of the need for Information Utilization Ability in School Work

吉村 燦我\*  
Sanga YOSHIMURA\*

常葉大学教育学部初等教育課程数学専攻\*  
Faculty of Education, Tokoha University\*

〈あらまし〉日本の教員の勤務時間は年々増加している。文部科学省は、教師の多忙化解消、負担軽減のために有効な手段として、校務の情報化を挙げている。また、校務情報化推進には教員の情報活用能力が必要不可欠であると考えられる。これまで、教育の情報化は教員の負担軽減に効果的であること、校務支援システムの利用は校務の効率化、教員の負担軽減につながることは明らかにされてきた。しかし、校務情報化に必要な情報活用能力が勤務時間に関連があるかは調査されていない。そこで、本研究では現職教員への質問紙調査、小学校の管理職にインタビューを実施し、情報活用能力と勤務時間の関連や学校業務遂行における情報活用能力の必要感を検討した。その結果、教職経験が短ければ情報活用能力が勤務時間減少に関連があることや情報活用能力は学校業務遂行に必要なことが示唆された

〈キーワード〉 情報活用能力 校務効率化 負担軽減

## 1. はじめに

近年、教員の勤務時間の超過に関心が集まっている。文部科学省(2017a)によると教員の1日当たりの学内勤務時間は、小学校教員では平日11時間15分、土日1時間7分である。これは前回調査(平成18年度)と比較すると、平日では43分、土日では49分増加している。こうした勤務実態から、文部科学省(2018)は「学校における働き方改革」により、教師が心身の健康を損なうことのないよう業務の質的転換を図り、限られた時間の中で児童生徒に接する時間を十分に確保し、児童生徒に真に必要な総合的な指導を持続的に行うことのできる状況を作り出すことを目指すとしている。

一方、文部科学省(2010)は「教育の情報化に関する手引」において、「業務の軽減と効率化」や「効果的な授業」等を目指し、教育の情報化を推進するとしている。また、教育の情報化を推進するにあたり、全ての教員に求められる基本的な資質能力として、「教員のICT活用指導力」を挙げている。また、日本教育情報化振興会(2007)は、校務情報化推進の留意点として、システム等を利用するために「教員のICTリテ

ラシー」の向上が必要不可欠であると述べている。文部科学省(2007)によると「教員のICT活用指導力」については、5のカテゴリー(A:教材研究・指導の準備・評価などにICTを活用する能力、B:授業中にICTを活用して指導する能力、C:児童生徒のICT活用を指導する能力、D:情報モラルなどを指導する能力、E:校務にICTを活用する能力)からなり、「授業におけるICT活用の指導」だけでなく、「校務におけるICT活用する能力」も含まれている。平成29年度教員の「ICT活用指導力の状況」の結果では「A:教材研究・指導の準備・評価などにICTを活用する能力」「E:校務にICTを活用する能力」においてそれぞれ80%以上の教員が「わりにはできる」「ややできる」と回答している。教員は教材研究・指導準備・評価・校務においてICTを活用できていると認識しているのである。しかし授業準備、校務遂行はICTを活用したものだけではないと考えられる。教員の勤務時間削減に向けた校務の情報化への対応も含め、学校業務を効率的に遂行するためにはICTの活用を含む、情報の収集、判断、表現、処理、創造等ができる能力が必要になると考えられる。

平成 29 年告示学習指導要領（文部科学省 2017b）において、情報活用能力は「コンピュータ等の情報手段を適切に用いて情報を収集・整理・比較・発信・伝達したりする力であり、さらに、基本的な操作技能やプログラミング的思考、情報モラル、情報セキュリティ、統計等に関する資質・能力等も含むもの」とされている。この情報活用能力は学習の基盤となる資質・能力と位置付けられた。教員が授業準備をする際にも、授業での学習成果を整理したり評価したりする際にも、あるいは事務処理をする際にも、教員自身が持っている情報活用能力が基盤として機能していると考えられる。そのため、学校業務の効率化には情報活用能力が関係していると考えられる。

校務情報化に関する研究では、石塚ら（2006）校務に ICT を導入することで教職員の負担は軽減されることを明らかにしている。また、より効率的な校務処理のために、複雑でなく簡単な操作で利用できる支援システムが必要であることを指摘している。校務の情報化として挙げられている校務支援システムの効果としては、堀

田ら（2011）が小・中学校の教員を対象に校務支援システムの利用の有無による比較分析を行い、利用者と未利用者で「教師の負担軽減」「効率的な処理」の平均値の差が大きかったことを示した。さらに、小林（2017）は校務情報化の良い点として、校務支援システム等の導入を図ることにより、教職員の負担感が軽減され、効率化されていると述べている。

以上の研究の成果から、校務支援システムの利用を含む、校務情報化は教員の勤務時間削減や負担軽減、校務効率化に効果的であると考えられる。

このように、教育の情報化は教員の負担軽減に効果的であること、校務支援システムの利用は校務の効率化、教員の負担軽減につながることは明らかにされている。しかし、情報活用能力と教員の勤務時間の関連や、学校業務遂行における情報活用能力の必要感は明らかになっていない。

## 2. 研究の目的

本研究では、教員の「勤務時間」と「情報活

表 1 質問項目

1. 興味を持った事柄については、徹底的に情報を集める。	14. 多くの資料を検討して、結論を導くのは得意である。
2. 授業でわからないことがあっても、先生に質問したり、教科書や参考書で調べることはしない。	15. 意見がたくさんあっても、うまくまとめられる。
3. 資料は自分で集めずに、友達からもらって済ますことのほうが多い。	16. 長い文章でも、その要点はたいてい把握できる。
4. わからない事柄があったら、辞書や辞典、インターネット（SNS含む 以下同じ）で調べるようにしている。	17. 課題をやるとき、人のまねをすることが多い。
5. 人やインターネットから聞いた話が本当かどうかを、後で確かめることはない。	18. 物事を人とは違う観点から考えてみるほうである。
6. 人やインターネットの噂をすぐに信じる方だ。	19. 他の人の考えや意見を紹介するよりも、自分の考えや意見を発表することのほうが好きである。
7. 新聞やテレビ、インターネットで言われることを、信じる方である。	20. 人と違った意見を考えるのは苦手である。
8. テレビで知ったことを、あとから本やインターネットなどで確認する。	21. 小さな子と話すときには、なるべく難しい言葉を使わないように心がけている。
9. 調べたことを整理するとき、文章だけでなく図や表も活用するよう心がけている。	22. 人と話す時、相手が何を知りたがっているか考えない。
10. 集めた情報は、整理しないでおくことが多い。	23. 相手の反応に気を配りながら話すほうである。
11. たくさんの情報を集めたときは、似た内容ごとに分類するようにしている。	24. 大勢の前で発表するときは、いうべきことを整理してから話すようにしている。
12. 文章を理解するために、自分で図や表に書き直してみることがある。	25. ICTを全般に活用することが得意だ。
13. 問題を解くとき、筋道を立てて考えるよりは、思いつきで結論を出すことが多い。	26. ICTを積極的に活用しようと思う。

用能力」には関係があるのか、相関係数みること、関連性を検討すること、管理職へのインタビューを通じて情報活用能力の学校業務への必要感を検討することを目的とする。

### 3. 研究の方法

#### 3.1. 質問紙調査

##### 3.1.1. 調査対象者

現職の公立小、中学校教員 96 名に対して質問紙調査を行った。合計 133 名に質問紙調査を依頼し、得られた回答は 96 件であった（回収率 72%）。

##### 3.1.2. 調査時期

調査時期は 2018 年 5 月中旬から 2018 年 11 月中旬までで行われた。

##### 3.1.3. 調査方法と質問項目

高比良ほか（2001）の情報活用の実践力尺度を用いた。沖林ほか（2007）を参考にし、尺度項目の 6 因子それぞれについて、因子負荷量の高い順に 4 項目ずつ、合計 24 項目を用いた。オリジナルの項目から一部削除した理由は、調査協力者の回答への負担を軽減させるためである。また、高比良ほかの情報活用の実践力尺度は 2001 年作成であり、作成から 17 年間経過しているため、現在の情報社会の状況を鑑み、情報教育を専門とする大学教員の指導のもと、修正を加えた。以上の全 24 項目に、ICT 活用に対する考えを測る質問 2 項目を加えた全 26 項目の質問紙を作成し、5 件法（1 全く当てはまらない、2 当てはまらない、3 どちらでもない、4 あてはまる、5 非常にあてはまる）で回答を求めた（表 1）。フェイスシートでは、1 日の平均勤務時間、性別、年齢、教職歴、担当学年、校務分掌を調査した。

#### 3.1.4. 分析方法

情報活用能力の質問項目計 26 項目の合計得点と勤務時間の相関をみた。分析には Web 上のフリーソフトである js-STAR を用いた。

### 3.2. インタビュー調査

#### 3.2.1. 調査対象者

文部科学省（2008）は、校長や副校長・教頭などは、教職員の勤務の状況・勤務時間外における業務の内容やその時間数を把握し、適切に管理する責務を有するとしている。そのため、調査対象者を現職の小学校管理職である、校長 10 名、教頭 1 名の計 11 名とした。

#### 3.2.2. 調査時期

調査時期は 2018 年 11 月中旬から 2018 年 12 月上旬までで行われた。

#### 3.2.3. 調査方法と質問項目

インタビューは時間的制約や調査対象者の負担を考え、メールで行った。質問項目については、小学校教員経験者であり、情報教育を専門とする大学教員の指導のもと質問項目を 5 項目設定した（表 2）。

#### 3.2.4. 分析方法

質問項目ごとにカテゴリ名をつけ、回答内容を分類し、質問項目ごとに回答に直接確率計算を行い、確率を求め有意差をみた。回答結果は自由記述の内容で触れていないことは、回答していないものと仮定して分類を行った。（例：「校務において必要だと考える」という内容は「校務において必要」「授業において必要でない」と分類、「校務、授業において必要だと考えられる」という内容は「校務において必要」「授業において必要」と分類した。）また、回答内容が重複した場合はそれぞれカウントすることとした。

表 2 質問の内容

質問 1	若手教師・中堅教師・ベテラン教師の働き方にどんな違いがあるでしょうか。
質問 2	ICT を活用した授業や校務遂行について、その必要感についてどのように感じていますでしょうか。
質問 3	仕事をする上で教師の ICT 活用指導力が役立っていると思うこと・感じていることは何でしょうか。
質問 4	仕事をする上で教師の ICT 活用指導力が備わっていないと大変になることは何ですか。
質問 5	学校で効率的に校務に取り組める教師は ICT 活用指導力 高いと思いますか。（思う／思わない）また、それはなぜですか。例があれば、教えてください。

表3 全体の結果

区分	相関係数	有意差
全体	$r = -0.069$	<i>n.s.</i>
男性	$r = -0.064$	<i>n.s.</i>
女性	$r = -0.143$	<i>n.s.</i>
管理職	$r = 0.293$	<i>n.s.</i>
学年主任	$r = -0.276$	<i>n.s.</i>
一般教諭	$r = -0.112$	<i>n.s.</i>
若手	$r = -0.324$	+
中堅	$r = 0.188$	<i>n.s.</i>
ベテラン	$r = -0.003$	<i>n.s.</i>

#### 4. 結果と考察

##### 4.1. 質問紙調査結果

勤務時間と情報活用能力を調査した質問紙の全体の結果は以下のとおりである（表3，図1）．情報活用能力と勤務時間の相関係数は  $r = -0.069$  (*n.s.*) で有意な差はみられなかった．

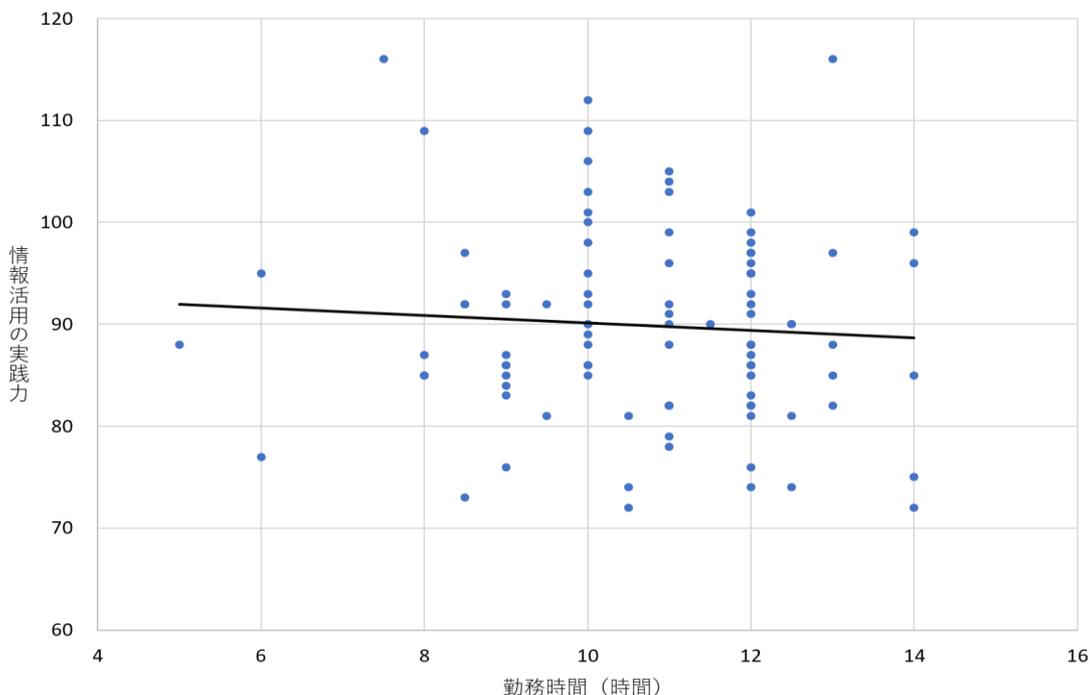
##### 4.1.1. 性差による比較結果

男性教員の情報活用能力と勤務時間の相関係数は  $r = -0.064$  (*n.s.*) で有意な差はみられなかった．女性教員の情報活用能力と勤務時間の相関係数は  $r = -0.143$  (*n.s.*) で有意な差はみられなかった．これは性別によっては勤務時間，情報活用能力に大きな特徴が見られなかったためだと考えられる．

##### 4.1.2. 職位による比較結果

管理職である教員の情報活用能力と勤務時間の相関係数は  $r = 0.293$  (*n.s.*) で有意な差はみられなかった．学年主任である教員の情報活用能力と勤務時間の相関係数は  $r = -0.276$  (*n.s.*) で有意な差はみられなかった．一般の教員の情報活用能力と勤務時間の相関係数は  $r = -0.112$  (*n.s.*) で有意な差はみられなかった．これは職位による仕事量の違い，経験の違い，能力の違いが様々だったためと考えられる．職位によって仕事量が違うのは明らかであるが，効率的に仕事ができるものには仕事が集まってくると考えられるため，情報活用能力が高くても勤務時間が短くなることはなかったと考えられる．

図1 全体の結果



#### 4.1.3. 教職歴による比較結果

教職歴 1 年～9 年若手教員の情報活用能力と勤務時間の相関係数は  $r = -0.324$  (+) で弱い負の相関が見られ、有意な差が認められた。教職歴 10 年～24 年中堅教員の情報活用能力と勤務時間の相関係数は  $r = 0.188$  (n.s.) で有意な差はみられなかった。教職歴 25 年～39 年中堅教員の情報活用能力と勤務時間の相関係数は  $r = 0.003$  (n.s.) で有意な差はみられなかった。これは、若手教員は自分に与えられた仕事をこなすことで精いっぱいであり、自分以外の仕事をする機会も少ないからだと考えられる。また、若手教員は独身の割合が高く、自分が自由に使える時間が大きいことも関係していると考えられる。中堅・ベテラン教師は自分以外の仕事もこなし、学校全体を考えて仕事をしているため、おのずと仕事量が増加していると考えられる。加えて、ベテラン教員は、ICT 活用について、従来のやり方が使えないことが多くなり、新しいことに対応する順応力が低いために時間がかかることが多いため、情報活用能力を校務に生かし切れていないことも要因として考えられる。

#### 4.2. インタビュー調査結果

本研究では、カテゴリごとと回答内容を分類し、回答に直接確率計算を行い、確率を求め有意差を見た結果を示す(表 4)。また、それぞれの管理職の回答内容から考察する。

##### 4.2.1. 質問項目 1 の結果と考察

質問項目 1 「若手教師・中堅教師・ベテラン教師の働き方にどんな違いがあるでしょうか。」

質問項目 1 はカテゴリ名を「年齢別の働き方」と名付けた。インタビュー対象者 11 名中 7 名が「違いがある」と回答し、4 名が「違いがない」と回答しており、有意な差はみられなかった ( $p = 0.274$  (n.s.))。

このことから年齢別では働き方に違いがないことが考えられる。回答内容では「若手は与えられたことをこなす、中堅は自分なりの工夫をする、ベテランはよりよいものを目指す」「若手は学級をみる、中堅は学年をみる、ベテランは学校をみる」「若手は目の前のことをこなすこと

で精いっぱい、中堅は経験したことはこなせる、ベテランはある程度のことはこなせる」「教育への熱意、センスが関係している」「教職年数よりも、家事、未婚既婚、子育て・介護の有無が関係している」などの回答が得られた。このことから、教員の働き方には教職年数だけでなく熱意や家庭環境が関係していることが示唆された。

##### 4.2.2. 質問項目 2 の結果と考察

質問項目 2 「ICT を活用した授業や校務遂行について、その必要感についてどのように感じていますでしょうか。」

質問項目 2 はカテゴリ名を「ICT 活用の必要感」と名付けた。インタビュー対象者 11 名中 9 名が校務において必要と回答し、2 名が校務において必要とは回答しておらず、有意な差が認められた  $p = 0.033^*$  ( $p < 0.05$ )。また、インタビュー対象者 11 名中 11 名が授業において必要と回答し、有意な差があった ( $p = 0.001^{**}$  ( $p < 0.01$ ))。

このことから ICT を活用した授業や校務遂行は非常に必要であると考えられる。回答内容では「授業で拡大して見せることは大変効果が見られる」「ICT 器機の授業活用はその授業の目標達成と子どもの興味関心のためにとっても有効」「授業での ICT 活用もあったほうが主体的・対話的で深い学びに向けた授業改善の可能性は広がる」「授業を効率的に限られた時間で遂行したり、校務事務を合理的かつ円滑に遂行するには ICT の活用は必要不可欠である」「ICT 機器の活用で校務処理は楽になりとても助かる」などの回答が得られた。ICT を活用した授業や校務遂行は、効果的な授業・校務の効率化において必要であることが示唆された。

##### 4.2.3. 質問項目 3 の結果と考察

質問項目 3 「仕事をする上で教員の ICT 活用指導力が役立っていると思うこと・感じていることは何でしょうか。」

質問項目 3 は「ICT 活用指導力の仕事への役立ち(役立っていること)」と名付けた。インタビュー対象者 11 名中 3 名がすべての業務で役立つと回答し、8 名はすべての業務で役立つと

は回答しておらず、有意な差はみられなかった ( $p=0.113$  (*n.s.*)). また、インタビュー対象者 11 名中 7 名が校務において役立つと回答し、4 名は校務において役立つとは回答しておらず、有意な差はみられなかった ( $p=0.274$  (*n.s.*)). さらに、インタビュー対象者 11 名中 4 名が授業において役立つと回答し、7 名は授業において役立つとは回答しておらず、有意な差はみられなかった ( $p=0.274$  (*n.s.*)).

このことから、ICT 活用指導力は仕事をする上で役立ってはいないと考えられる。しかし、回答内容では 3 名の管理職が「すべての業務において役立つ」と回答している。また、「校務において役立っている」と回答した人の中では、「時間割作成や授業時数の管理、職員間の文書の共有管理に ICT 活用指導力は役立っている」「HP や日々のブログ作成に ICT 活用指導力は役立っている」「校務処理での ICT 活用指導力は役立っている」などの回答が得られた。「授業において役立っている」と回答した人の中では、「ICT 活用指導力が高ければきっちり「めあて」を達成でき、効率のいい授業をできると思う」「指導内容の充実につながっている」という回

答が得られた。さらに、11 名中 11 名全員が授業か校務遂行どちらかには役立つと回答している。これらのことから、ICT 活用指導力が仕事をする上で役立つ可能性は大きいことが考えられる。

#### 4.2.4. 質問項目 4 の結果と考察

質問項目 4 「仕事をする上で教員の ICT 活用指導力が備わっていないと大変になることは何ですか。」

質問項目 4 は「ICT 活用指導力の仕事への役立ち (困ること)」と名付けた。インタビュー対象者 11 名中 2 名が全てのことにおいて「ないと困る」と回答し、9 名はすべてのことで「困る」とは回答しておらず、有意な差があった ( $p=0.033^*$  ( $p<0.05$ )). また、インタビュー対象者 11 人中 8 名が校務においてないと困ると回答し、3 名は校務においてないと困るとは回答しておらず、有意な差はみられなかった ( $p=0.113$  (*n.s.*)). そして、インタビュー対象者 11 名中 2 名が校務 (特にチーム) においてないと困ると回答し、9 名は校務 (特にチームでの) にお

表 4 インタビュー調査の結果

カテゴリ	回答結果		直接確率計算
1.年齢別の働き方	違いがある	違いがない	$p=0.274$ <i>n.s.</i>
	7人(63.6%)	4人(36.4%)	
2.ICT活用の必要感	校務において必要	校務において必要でない	$p=0.033$ *
	9人(81.8%)	2人(18.2%)	
	授業において必要	授業において必要でない	$p=0.001$ **
	11人(100%)	0人(0%)	
3.ICT活用指導力の仕事への役立ち (役立っていること)	全ての業務で役立つ	全ての業務では役立たない	$p=0.113$ <i>n.s.</i>
	3人(27.3%)	8人(72.7%)	
	校務において役立つ	校務において役立たない	$p=0.274$ <i>n.s.</i>
	7人(63.6%)	4人(36.4%)	
	授業において役立つ	授業において役立たない	$p=0.274$ <i>n.s.</i>
	4人(36.4%)	7人(63.6%)	
4.ICT活用指導力の仕事への役立ち (困ること)	全てのことにおいてないと困る	全てのことではないと困らない	$p=0.033$ *
	2人(22.2%)	9人(81.8%)	
	校務においてないと困る	校務においてなくても困らない	$p=0.113$ <i>n.s.</i>
	8人(72.7%)	3人(27.3%)	
	校務 (特にチーム) においてないと困る	校務 (特にチーム) においてなくても困らない	$p=0.033$ *
	2人(22.2%)	9人(81.8%)	
	授業においてないと困る	授業においてなくても困らない	$p=0.500$ <i>n.s.</i>
	5人(45.5%)	6人(54.5%)	
	人間関係においてないと困る	人間関係においてなくても困らない	$p=0.033$ *
	2人(22.2%)	9人(81.8%)	
5.ICT活用指導力と効率化の関連性	関係があると思う	関係がないと思う	$p=0.011$ *
	11人(100%)	2人(22.2%)	

\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

いてないと困るとは回答しておらず、有意な差はみられなかった ( $p=0.033$  (n.s.)). さらに、インタビュー対象者 11 名中 5 名が授業においてないと困ると回答し、6 名は授業においてないと困るとは回答しておらず、有意な差はみられなかった ( $p=0.500$  (n.s.)). 最後に、インタビュー対象者 11 名中 2 名が人間関係においてないと困ると回答し、9 名は人間関係においてないと困るとは回答しておらず、有意な差はみられなかった ( $p=0.033$  (n.s.)).

このことから、ICT 活用指導力がないと大変になる仕事はないことが考えられる。「校務においてないと困る」と回答した人は 8 名で、「授業においてないと困る」と回答した 5 名よりも多いため、授業よりも校務遂行の際に ICT 活用指導力がないと大変になる可能性があると考えられる。回答の中には「情報共有や管理ができないと困る」や「情報漏洩等の重大事故による学校の信頼失墜につながりかねない」という回答があり、校務遂行のなかでも情報の管理において ICT 活用指導力が備わっていないと大変になると考えられる。また、「校務においてないと困る」と回答した 8 名のうち 2 名は「チームでの作業が煩雑になり、困ることがある」「チームや全体が停滞したり、業務が遂行・完結できなかったりすることにもなりかねない」のように、「特にチームで行う校務の時にないと困る」と回答しており、校務を遂行する中でもチームでの仕事に影響する可能性があることが示唆された。さらに、「人間関係においてないと困る」と回答した 2 名からは「職場の仲間との情報交換や共有ができない」「子どもや保護者とのコミュニケーションが成立しない」の回答があった。人間関係においても、コミュニケーションをとるツールを活用するために、ICT 活用指導力は必要になる場合があることが示唆された。

#### 4.2.5. 質問項目 5 の結果と考察

質問項目 5 「学校で効率的に校務に取り組める教師は ICT 活用指導力が高いと思いますか。(思う／思わない)  
また、それはなぜですか。例があれば、教えてください。」

質問項目 5 は「ICT 活用指導力と効率化の関

連性」と名付けた。インタビュー対象者 11 名中 11 名が「関係があると思う」と回答し、そのうち 2 名が「関係がないと思う」とも回答しており、有意な差があった ( $p=0.011^*$  ( $p<0.05$ )). 回答内容では「ICT 活用指導力が高い教師は、例えば教材研究、授業実践、校務分掌へ効率的に取り組んでいる」「校務処理に関して言えば、ICT 活用指導力と効率的な仕事はかなりの相関関係があると思う」といった回答が得られたことから、ICT 活用指導力は、教材研究、授業、校務遂行など教員の仕事の効率化に実用性があると考えられる。また、「関係があると思わない」と回答した 2 名の回答からは「提案文や家庭への通知文では ICT 活用指導力以前の問題として国語力や配慮する力の差が関係している」「生徒指導や保護者対応などで、信頼を得ながら進められる教員は、一概に ICT 活用指導力が高いとは言えない」という回答が得られた。このことから、文章を書く際や、生徒指導、保護者対応においては ICT 活用指導力が実用的でない可能性があることが示唆された。

#### 4.3. 総合考察

質問紙調査の結果からは、一概には教員の情報活用能力と勤務時間には相関関係があるとは言いきれないと考えられる。勤務時間と情報活用能力に顕著に有意な差がみられなかったことから、勤務時間には情報活用能力ではなく、教員個人の考え方などの他の要因も大きいと考えられる。

インタビュー調査では、質問項目 3、4 から「全ての業務において ICT 活用指導力が役立つ」、「全ての業務において ICT 活用指導力がないと困る」という回答が得られたことや、「ICT 活用指導力がないとチームで行う校務において困る」という回答があったことから、ICT 活用指導力は教員の基本的な資質能力になってきていると考えられる。会議の資料をデジタル化したり、電子掲示板を活用したりしている学校も見られたため、ICT 活用指導力が低いと校務に影響が出ることが考えられる。

質問項目 2、3、4 からは ICT 活用指導力の必要感や校務遂行よりも授業の方が高いが、実用性は授業よりも校務遂行で感じていると考えられる。授業での ICT 活用では学校の環境に左

右されると考えられることや、質問項目1で働き方は教育への熱意やセンスが関係しているという回答から、環境が整っていない学校や教員の授業への考え方の違いが要因だと考えられる。よって、ICT活用指導力の授業への実用性は、校務遂行への実用性より低い結果だったと考えられる。校務遂行では、成績や会計などのデータの管理や、通知表作成、メール送受信、HPでの情報発信などICT機器を活用しなければいけないものが多くあり、ICT活用指導力が必要で、実用性が高いと考えられる。また、授業においては、11名全員がICT活用指導力を必要と感じているが、実用性は校務遂行ほど感じていないことから、授業において教員のICT活用指導力がいかせる環境づくりや、研修制度などが必要になることが示唆された。

## 5. 今後の課題

今回の調査では、教員96名への質問紙調査、管理職11名にインタビュー調査をしたに過ぎない。本研究の結果を一般的なものにしていくためには調査対象者をさらに増やしていく必要がある。また、勤務時間削減という観点では情報活用能力のみが関係しているわけではないと考えられるため、ほかの要因での調査をすることや、現職教員にインタビュー調査をすることも今後検討していきたい。

## 謝辞

本研究でインタビュー調査にご協力いただいた管理職の皆様、その関係者の皆様に深謝いたします。

## 参考文献

石塚丈晴, 堀田龍也, 笹田森, 和田真理  
(2006) 公立小・中学校における校務へのコンピュータ利用に関する調査. 日本教育工学会研究報告集, 5: 1-6

堀田龍也, 山本朋弘, 宮田明子, 鈴木広則  
(2011) 校務支援システムの機能の必要性に関する調査結果. 日本教育工学会第27回全国大会講演論文集: 517-518  
小林 (2017) 校務の情報化の現状と課題. 教育経営学研究紀要, 19: 113-120  
文部科学省 (2007) 教員のICT活用指導力の基準 (チェックリスト)  
文部科学省 (2008) 学校の組織運営の在り方を踏まえた教職調整額の見直し等に関する検討会議  
文部科学省 (2010) 教育の情報化に関する手引  
文部科学省 (2017) 教員勤務実態調査 (平成28年度) の集計 (速報値) について  
文部科学省 (2017) 平成29年告示学習指導要領  
文部科学省 (2018) 学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果  
日本教育情報化振興会 (2007) 校務情報化のための手引  
高比良美詠子, 坂元章, 森津太子, 坂元桂, 足立れにか, 鈴木佳苗, 勝谷紀子, 小林久美子, 木村文香, 波多野和彦, 坂元昂 (2001) 情報活用の実践力尺度の作成と信頼性および妥当性の検討. 日本教育工学雑誌, 24 (4): 247-256

(指導: 佐藤和紀)